

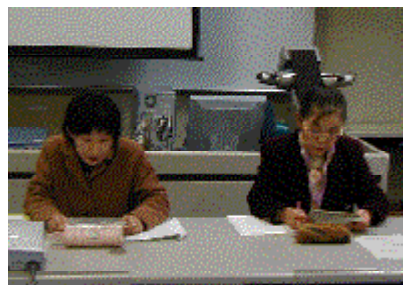
## 単元 「変わり方のきまり」(第5学年)

### (1) 提案の概要

「少ない場合から順に調べてきまりを見つける」という考え方の習得に向けて、単元前半を等質、後半は習熟度別で編成した少人数指導の実践である。

ビデオでも紹介したように具体的な操作の時間も十分に確保し、解決の糸口が見つからない子どもにはヒントカードなども用意した。

また、香算研作成の判断基準も参考にしながら、毎時間、観点ごとの判断基準を設定し個の学習状況を把握していった。ここでの各時間の形成的評価が、次の時間にきめ細かく児童にかかわっていくことに役立ったと考える。授業を受けた児童も、こうした少人数指導に対しては、「発表や質問がしやすい」「先生がよくみてる」などと肯定的に受け止めていたようである。



### (2) 討議の概要

提案事例では、各時間の評価について、その基準をしっかりと設けてきめ細かに学習状況を把握することができている。

ところで、本実践のような単元においては、計算技能などの評価と違い、単元の途中ではAと評価できたのに単元末にテストをしてみるとBやCという結果になったということはないか。この単元に限らず、日々の評価の中でそのようになり判断に困った経験がある。もちろん、単元途中にBだった子どもが補充的な学習などで理解を深め最終的にAとなったならば、それはAの力があると認めていきたい。しかし、このような場合はどう判断していけばよいのか課題である。

### (3) ご指導の概要

授業の中でいろいろな体験をしていくこと、よりよい考えを選択していくことが大切である。本実践では、ひごを使っての具体的な操作や、他の考えにふれていく中で自分の考えを修正していくことなどが重視されていた。

1時間の授業の中では行う評価は1つでよい。そして、単元の過程の評価と終末の評価を総括することで、単元全体としてはどの児童も4つの観点すべての評価ができていければいいのである。評価は評価のためでなく、支援に生かすためのものでありたい。

少人数の指導については、まずねらいは何かを明確にしたい。授業のどこが変わらなければならないのか。人数が減ったからというだけで、みんなでやるときと同じでは少しさびしい。理解度や到達度に応じた展開、興味・関心に応じた展開にしていくことで、ダイナミックな展開ができるであろう。